OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アクセントとイントネーションの逸脱に対して感じる違和感について
Author(s)	郡, 史郎
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 17-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72795
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アクセントとイントネーションの逸脱に対して感じる違和感について

郡 史郎

要旨　日本語におけるアクセントやイントネーションの逸脱に対して感じられる違和感の程度について，聴取調査による簡単な検討をおこなった。2・3 拍の和語名詞は本来の型と異なるアクセントに感じられる違和感は一般には強い。その中で，本来は尾高型である語を平板型で言うことへの違和感は相対的に小さい。文内のイントネーションについては，意味の限定関係が決める規則の知識はあいまい文の言い分けにもじょうずな読みに聞こえるためにも必要だが，規則に違反した発音であっても，意味の違いが生じない限り，感じられる違和感は小さい。

1 はじめに

日本語の文章をじょうずに読むためには，アクセントとイントネーションの両方について適切な言い方を使う必要がある。日本語母語話者の読みにおける文内のイントネーション[1)]の適切さと，非母語話者の読みにおけるアクセントと文内のイントネーションの適切さがじょうずさの評価に貢献していることは，それぞれ郡(2017)と郡(2019)で聴取調査の結果にもとづいて報告した。特に郡(2019)ではアクセントの改善と文内のイントネーションの改善が相乗的効果をもたらすことを述べた。

しかし，上記の調査結果は，読みのじょうずさ評価を向上させる効果がどれだけあるかは，どこをどのように直すかしだいだということも示すものだった。学習者の観点からすれば，分節音と同様，アクセントやイントネーションについても優先的に学習・修正すべき項目とそうでないものがあるということになる。これは話しことばについても当然あてはまるだろう。

---

1) 文内のイントネーション：文の各文節のアクセントを弱めて言うか（当該文節の高さの動きの自立性を抑える形で発音することを指す），それとも弱めないで言うか，あるいは強めて言うかを文内のイントネーションと言う。文内のイントネーションの違いで，「けさ買ったばかりの傘をなくした」というあいまい文の 2 つの意味（買ったのがけさか，なくしたのがけさか）を言い分けることができる。直前の文節から意味的に限定される語のアクセントは弱めて言うが，意味的に限定されない場合はアクセントは弱めない。文法的な修飾関係は多くは意味的な限定関係でもあるが，「白い雪」「夏目漱石の『坊っちゃん』」のように，意味的な限定関係がない場合がある。また，文内で伝えたいという気持ちが強い語句，つまりフォーカスが置かれる語句は，そのアクセントを弱めず（通常は強める），それ以降のアクセントを弱める。『日本語学大辞典』の「イントネーション」の項では【構成要素】として「日本語のイントネーションを形づくる重要な要素として，文末および文節末での高低変化と，文全体がどのように句に分かれるかというふたつがある」としたが，後者（文全体がどのように句に分かれるか）が文内のイントネーションにあたる。一方，前者（文末および文節末での高低変化）は本稿では末尾のイントネーションと呼び，大きく，疑問型上昇調（連続的にどんどん上げる：疑問文での使用が典型的），強調型上昇調（直前より一段高くして，後はそのまま平らに言う：強い主張での使用が典型的），上昇下降調，無音調の 4 種に分ける（郡 2015）。

そこで，アクセントやイントネーションに関して優先的に学習・修正すべき項目は何かを知るために，本来なされるべき言い方から逸脱した言い方に対して感じられる違和感の大小を手がかりとした簡単な聴取調査をおこなった。本稿ではその結果を報告する。なお，本来なされるべき言い方とは東京など首都圏中央部のものを指すこととする。また，逸脱は日本語のアクセント・イントネーションの型として可能かつ通常の高低の動きの大きさの範囲内で考える。

アクセント・イントネーションの逸脱と違和感の強さ

ここではアクセントの型の間違いのような逸脱のしかたについて検討するわけだが，同じ逸脱のしかたでも語や文によって違和感が強い場合と，さほどでもない場合があるだろうと思う。

アクセントは和語の単純名詞では型の種類も多く，音構成や語構造からの予測がむずかしい。しかし，外来語の場合は音構成から，主に 5 拍以上の複合語は語構造から規則的に決まる部分が大きい。したがって，アクセントの逸脱に対して感じられる違和感の強さは語種によって異なることが考えられる。また，これは品詞によっても異なる可能性がある。たとえば，助動詞のアクセントの逸脱は，名詞の場合よりも違和感が強いと直感的には感じられる。

逆に，音構成によっては本来のアクセントではなくても一定の許容性がある場合がある。たとえば「三角」「スカート」のように本来の下がり目の後に撥音や長音がある語は，実際の発音では下がり目が撥音や長音の後にずれることがあるので，ずれる言い方への違和感は強くない可能性がある。形容詞などの体系的な変化の途上にあるアクセントは，旧形か新形かの違いへの違和感は強くないと思われる。また，同じ語でも，フォーカスの後で高さの動きが大きく抑えられる環境では，アクセントの逸脱に対する違和感は強くないかもしれない。

アクセントについてはさらに，「橋」「箸」「端」などのようにアクセントの違いのみで対立する語がある。対立する語がどれも頻用語であれば，アクセントの逸脱に対する違和感は強いことが想像される。対立がなくても，使用頻度が特に高い語はアクセントの逸脱に対する違和感は強いかもしれない。特に，自分の名前や自分になじみのある地名はアクセントに敏感になるということがある[2)]。

したがって，アクセントの逸脱に対する違和感の検討は，品詞や語種ごとに音構成や使用頻度，文環境を統制した上でおこなうべきだと考える。本稿ではその第一歩として，アクセントで対立する語を考えにくい 2・3 拍の日常的な和語名詞について，同一の文環境で検討する。

イントネーションは，文内のイントネーションと文末のイントネーションとで適切性や逸脱の性質が異なる。文内のイントネーションの場合，「けさ買ったばかりの傘をなくした」「呼んであげる」のようにイントネーションの違いで意味が変わる文では，適切でない言い方への違和感は強いと想像される。しかし，そうでなければ違和感は強くないかもしれない。熟練した読み手は適切な文内のイントネーションを通常使う（郡 2014）。しかし，たとえば鉄道駅での「黄色い点字ブロックの内側までお下がりください」という放送では，本来は弱めるべきで

2) よそ者が地元とは違う地名アクセントを使うことに対しては特に地元の抵抗が大きい。NHK もこのことに配慮している（『NHK 日本語発音アクセント新辞典』2016 年版，解説の p.36 参照）。

はない「点字ブロックの」のアクセントを弱める発音をプロの読み手でもしている例がある。

末尾のイントネーションは文末と文節末で果たす役割が異なる。たとえば,「わかってる？」と聞くときは文末は疑問型上昇調が適切だが，いちいち聞かなくても当然わかってると強く主張する意味で「わかってる！」と言う場合は強調型上昇調が適切であり，これを間違えると発話意図が伝わらなくなる。一方，文節末では，たとえば「本日は お忙しいなか お集まりいただきまして」の下線部は，疑問型上昇調でも強調型上昇調でも上昇下降調でも無音調でも発話意図の対立はなく，適切かどうかの判断は場面や発話スタイルについてのものになる。

本稿では，意味の対立がない文とある文での文内のイントネーションについて，そして意味の対立がある文末のイントネーションについて検討をおこなう。

先行研究

アクセントの逸脱に対して母語話者が感じる自然性を調査した結果がすでに崔壯源(2003)に報告されている。これは，3 拍から 5 拍までの語を含む「テレビとカメラをかえしてください」「はがきやてがみできもちをつたえる」「なつやすみにやまのぼりにいきたいです」「いもうとはおとうととでかけました」という 4 文について，各文節のアクセントを本来の型以外に，すべて 3 拍目から下がるように，あるいは平板型になるように操作した合成音声を使って，5 段階の自然度判断を求めた調査である。その結果については本稿の結果と比較する形で第 4 節で紹介する。ただ，崔氏の調査では調査対象に和語と外来語の単純名詞，複合名詞，動詞＋助動詞からなる述語という多様なものをひとつの文に含めており，しかも文中の全文節のアクセントを同時に変えて総合的に判断させているようなので，個々の文節のアクセントの逸脱と自然度評価の関係がわからないという問題がある。先に述べたように，アクセントの逸脱に対する違和感の強さは品詞や語種，文内位置で異なることが考えられるからである。

このほか，梁辰(2015)は，上級レベルの日本語学習者 2 名が「糸を使う」のような文の中の 2 拍名詞（主に和語）を 3 種のアクセント型（頭高，尾高，平板）で言いわけた音声を材料とし，これを日本語母語話者 6 名が 5 段階で評価した結果を報告している。これもアクセントの逸脱に対して母語話者が感じる自然性を知ることを目的としたものではあるが，非母語話者の発音を材料としているために，分節音の適切性など，問題とする文節のアクセント以外の要因が自然度の判断を左右している可能性を排除できず，目的にうまくかなった調査方法とは言えない。

一方，イントネーション，特に文内のイントネーションについては適切でない言い方に対する評価の調査の報告は管見の範囲ではないようである。本稿では，これをアクセントに対する評価と対比させながら検討する。

2 違和感調査の方法

2.1 アクセント

調査語はアクセントで対立する語を考えにくい 2・3 拍の日常的な和語名詞とし，主に金田一春彦氏の類別語彙からとった。現代東京でのアクセント型とともに表 1 に示す。「奈良」は，なじみのある地名のアクセントでは逸脱した型への違和感が強い可能性を考慮して加えた。

これらを，語によって「○○があります」「○○がいます」または「○○が見えます」など，当該語に格助詞「が」を付け，そこにフォーカスが置かれる文の枠に入れて，頭高型，中高型，平板型のそれぞれで筆者が発音し，44.1kHz, 16bit の LPCM 形式で録音した音声を聴取調査に使用した。「奈良」だけは「東大寺は奈良にあります」とした。

調査文の実際の高さの動きの例を図 1 に示す。図は，縦軸が高さで，上の方ほど音が高い。縦軸の目盛は 50Hz をベースとする半音値である。横軸は時間の経過で，目盛は秒である。

この音声を，2 秒間隔で連続して 2 回ずつ文字とともに調査協力者に提示し，その後 2.5 秒でそれぞれの言い方に対して違和感が「全然ない」「少しある」「相当ある」「非常に強い」の 4 つから選んで回答用紙に記入する形で評価を依頼した。音声の提示順はランダムである。調査協力者は首都圏中央部で成育した 20 歳代から 30 歳代前半までの 25 名（うち男性 2 名）である[3)]。調査は個別に調査者と対面しながら小型スピーカーを介しておこなったが，2 名は被調査者がひとりでおこなった。

表 1　アクセントの違和感調査に使用した調査語

2 拍	窓	傘	空	奈良	音	山	顔	風
本来のアクセント型	頭高	頭高	頭高	頭高	尾高	尾高	平板	平板
3 拍	涙	枕	斜め	あなた	表	宝	大人	魚（さかな）
本来のアクセント型	頭高	頭高	中高	中高	尾高	尾高	平板	平板

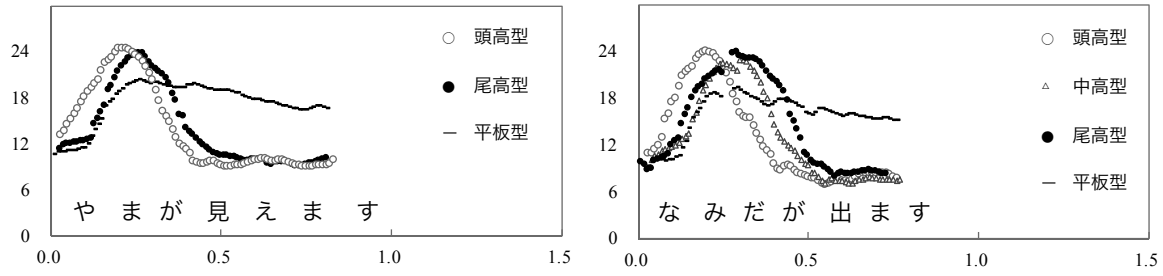

図 1　アクセントの違和感調査に使用した音声の高さの動きの例（山，涙）

2.2　イントネーション

調査文と検討内容を表 2 に，調査文の実際の高さの動きを図 2 に示す。

3) 首都圏中央部：筆者はかつて便宜的に「概ね東京 30km 圏」と補足する形でこの表現を使ったこともあるが，具体的には東京 23 区を中心に，南は横浜市まで，西は八王子市まで，北はさいたま市まで，東は千葉市までを含む地域を指している。

表２　イントネーションの違和感調査に使用した文と検討内容

■文内のイントネーションの調査文	検討内容
私は白い花が好きです。	「白い花が」で，「花が」のアクセントを弱化させる発音とさせない発音に対する違和感の大きさ。「白い」から意味的に限定されるので，弱化させるのが適切。
庭に白い雪が積もっていました。	「白い雪が」で，「雪が」のアクセントを弱化させる発音とさせない発音に対する違和感の大きさ。「白い」から意味的に限定されないので，弱化させないのが適切。
中国の学校にはプールがないらしい。	「中国の学校には」で，「学校には」のアクセントを弱化させる発音とさせない発音に対する違和感の大きさ。「中国の」から意味的に限定されるので，弱化させるのが適切。
中国の上海はきょうは快晴でした。	「中国の上海は」で，「上海は」のアクセントを弱化させる発音とさせない発音に対する違和感の大きさ。「中国の」から意味的に限定されないので，弱化させないのが適切。
ロシアのプーチン大統領が来日した。	「ロシアのプーチン大統領が」で，「プーチン大統領が」のアクセントを弱化させる発音とさせない発音に対する違和感の大きさ。「ロシアの」から意味的に限定されないので，弱化させないのが適切。
緊急の措置をとる必要があると言っています。	「とる」と「必要が」のアクセントを弱化させる発音とさせない発音に対する違和感の大きさ。どちらも直前の文節から意味的に限定されているので，どちらも弱化させるのが適切。
タクシーを呼んであげました。	「あげました」のアクセントを弱化させる発音とさせない発音に対する違和感の大きさ。補助動詞なので弱化させるのが適切。
救急車を呼んでください。	「ください」のアクセントを弱化させる発音とさせない発音に対する違和感の大きさ。補助動詞なので弱化させるのが適切。
■末尾のイントネーションの調査文	検討内容
【質問として】もう 10 時？	疑問型上昇調と強調型上昇調に対する違和感の大きさ。質問なので疑問型上昇調が適切。
【質問として】わかってる？	同上
【主張として】もう 10 時！	疑問型上昇調と強調型上昇調に対する違和感の大きさ。主張なので強調型上昇調が適切。
【主張として】わかってる！	同上

文内のイントネーションについては，ある文節のアクセントの実現度（当該文節の高さの動きの実現度）は，先行する文節から意味が限定されていれば弱めるが，そうでなければ弱めないという規則があるが[4)]，その規則を守らない言い方に対する違和感の強さはどの程度かを検討するのが表 2 の最初の 6 文である（「私は白い花が…」から「緊急の措置を…」まで）。

たとえば，「私は白い花が好きです」という文の「白い花が」であれば，「花」は赤でも黄色でもなく白いものを指しており，「白い」が「花」の意味を限定している。そのため「花が」のアクセントは弱めて［シ｜ロ｜イ ハ｜ナ｜ガ］と言うのが適切である。しかし，「庭に白い雪が

4) 郡(2008, 2012)。その結果，「限定文節＋被限定文節」が全体で 1 イントネーション句をなす。

積もっていた」の「白い雪が」の場合は，「雪」はもともと白いものであり，「白い」は「雪」の意味を限定しておらず，情景をイメージとして浮かびあがらせるといった目的で補足しているだけである。そのため，「雪が」のアクセントは弱めずに［シ|ロ|イ ユ|キ|ガ］と言うのが適切である。熟練した読み手や意味に敏感な読み手はこうした違いを言い分けるが，そうでない人は「白い雪が」の「雪が」のアクセントを弱めて読むことがよくある。

本稿では調査の対象にしていないが，「けさ買ったばかりの傘をなくした」というあいまい文は，「買ったのがけさ」の意味ならば「けさ」が「買った」の意味を限定するために「買った」のアクセントを弱める。しかし，「なくしたのがけさ」の意味であれば「けさ」は「買った」の意味を限定しないため「買った」のアクセントは弱めない。このように文内のイントネーションと意味の対応関係がはっきりしている場合は，熟練した読み手でなくても，たいていの人が意味の違いを高さの違いで言い分け，また聞き分けることができる[5)]。

では，「白い花が」「白い雪が」における意味の限定の有無と文内のイントネーションの対応関係を崩して,「白い花が」を［シ|ロ|イ ハ|ナ|ガ］,「白い雪が」を［シ|ロ|イ ユ|キ|ガ］のように言うのを聞くとどの程度の違和感を感じるのかを知ることが表2の最初の6つの調査文の目的である。これらはイントネーションによる意味の対立がない文である。

一方，表2の7・8文目は，補助動詞のアクセントは弱めるという規則に対して，その規則を守らない言い方に対する違和感の強さを検討するものである。「呼んであげました」なら補助動詞のアクセントは弱めて［ヨ|ンデアゲマ|シタ］，「呼んでください」なら［ヨ|ンデクダサ|イ］と言うのが適切である。しかし，補助動詞ではなく独立の動詞として「誰かのためにそれを呼んだ上で，その人にただで渡した」などの意味で言うなら，アクセントは弱めず，［ヨ|ンデ|ア|ゲマ|シタ］，［ヨ|ンデ|ク|ダサ|イ］と言う。つまり，これらはイントネーションによる意味の対立がある文である。

末尾のイントネーションについては2種類の上昇調の違いを調査項目とした。質問に対しては疑問型上昇調（連続的にどんどん上げる）を末尾に付け，強い主張に対しては強調型上昇調（直前より一段高くして，後はそのまま平らに言う）を付けることが典型的であり，適切性が高い。強い主張の場合は同時に末尾を強く言うことが多い。これに対して，質問に強調型上昇調を，強い主張に疑問型上昇調を使うと違和感をどの程度感じるか知ることが目的である。

調査に用いた音声は，まず筆者が検討対象文節のアクセントを弱めて発音した文と弱めないで発音した文を録音した。弱めて発音した文音声はそのまま調査に使用した。一方，弱めない発音として調査に使用した音声は，弱めて発音した文の検討対象文節（たとえば「花が」；接続を滑らかにするため，必要に応じてその前後も含む）を，弱めないで発音した文の当該箇所で置き換えたものとした。したがって，検討対象文節以外は同じ音声を共通枠として使用している。これは検討対象文節以外の部分の発音の違いの影響を排除するためである。ただ，いくつかの

5) 話者1名の発音を使った聞き分け調査では首都圏中央部育ちの大学生20名のうち18名が正解。

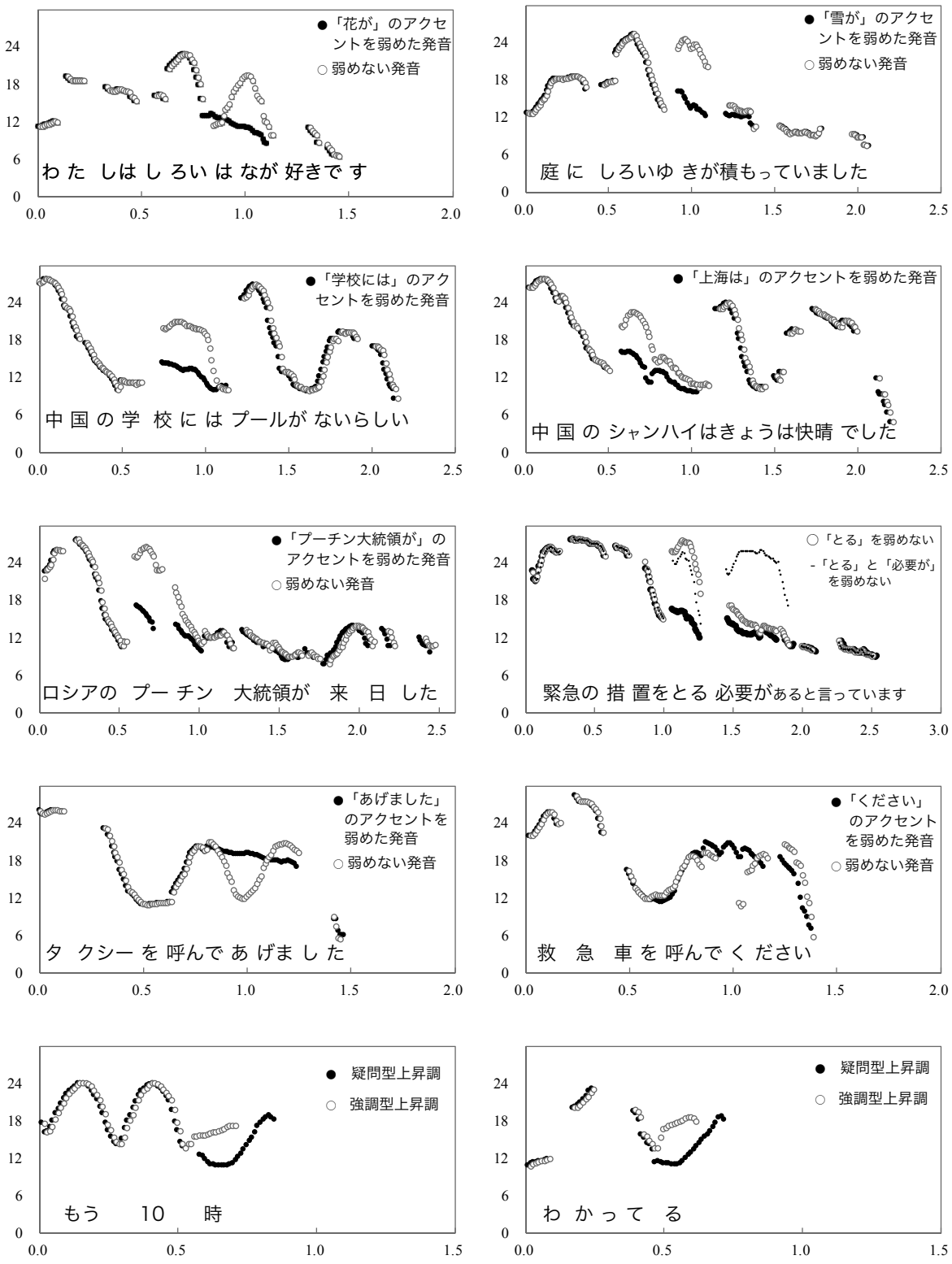

図２　イントネーションの違和感調査に使用した音声の高さの動き

文については，共通枠としてアクセントを弱めないで発音した文音声を使用している。これは，そちらの方が全体として自然度が高い音声が得られると判断したためである。図 2 で●印の連続で示したのが検討対象の文節のアクセントを弱めた発音，○印の連続が弱めない発音である。

音声は 2 秒間隔で 2 回ずつ文字とともに提示し，その後 2.5 秒でそれぞれの言い方に対して違和感が「全然ない」「少しある」「相当ある」「非常に強い」の 4 つから選んで調査用紙に記入するよう依頼した。提示順はランダムである。調査は，前節で説明したアクセント調査の直前におこなった。ただし，調査協力者は女性 1 名が加わった 26 名である。

3 結果

3.1 和語名詞のアクセントの逸脱に対する違和感

結果を図 3（2 拍名詞）と図 4（3 拍名詞）に示す。図では，左から右に，違和感得点[6)]の小さい言い方から大きい言い方へと並べ，それぞれの言い方に対して感じられた違和感の強さの割合を積み上げ縦棒の形式で示している。項目軸で「山⓪」のように「⓪」を付けて書いたのは，その語を平板型（下がり目がないという意味で⓪）にした言い方という意味である。「①」「②」は，語頭から数えた場合のアクセントの下がり目が，それぞれ 1 拍目の直後，2 拍目の直後にある言い方ということである。①が頭高型の発音で，②は 2 拍名詞の場合は尾高型の発音，3 拍名詞の場合は中高型の発音である。③は 3 拍名詞の場合の尾高型の発音である。また，「山⓪」などの下にある「2→0」等は，東京式本来のアクセントである「2」，つまり 2 拍目の後に下がり目がある語を「0」，つまり平板型で発音した音声であることを示す。

なお，東京式本来のアクセントでの発音については，「山」（尾高型）に対して 1 名が違和感が「少しある」と答えたが，それを除けばすべて違和感は「全然ない」であった。

2 拍和語名詞の場合

・アクセントを本来の型から変えた発音は,「相当」以上の強い違和感が感じられることが多い。

・その中でも，特に頭高型と平板型を入れ替えた言い方，つまり，本来は頭高型の語を平板型で発音した音声，そして本来は平板型の語を頭高型で発音した音声に感じられる違和感は特に強い。図 3 では頭高型と平板型を入れ替えた言い方に白抜きの指さし記号を付けたが，そのほとんどが図の右にかたまっていることがわかる。

・尾高型と平板型を入れ替えた言い方への違和感は相対的に強くない。図 3 ではこれに小さめの黒い指さし記号を付けたが，それらが図の左にかたまっていることがわかる。

・「奈良」を本来の頭高型から変えた言い方は違和感がもっとも強い。なじみのある地名のアクセントでは逸脱した型への違和感が強いという仮説に合致する結果となった。

3 拍和語名詞の場合

・ここでもアクセントを変えた発音は「相当」以上の強い違和感が感じられることが多い。

---

6) 便宜的に，違和感が「全然ない」を 0 点，「少しある」を 1 点，「相当ある」を 2 点，「非常に強い」を 3 点として集計したもの。

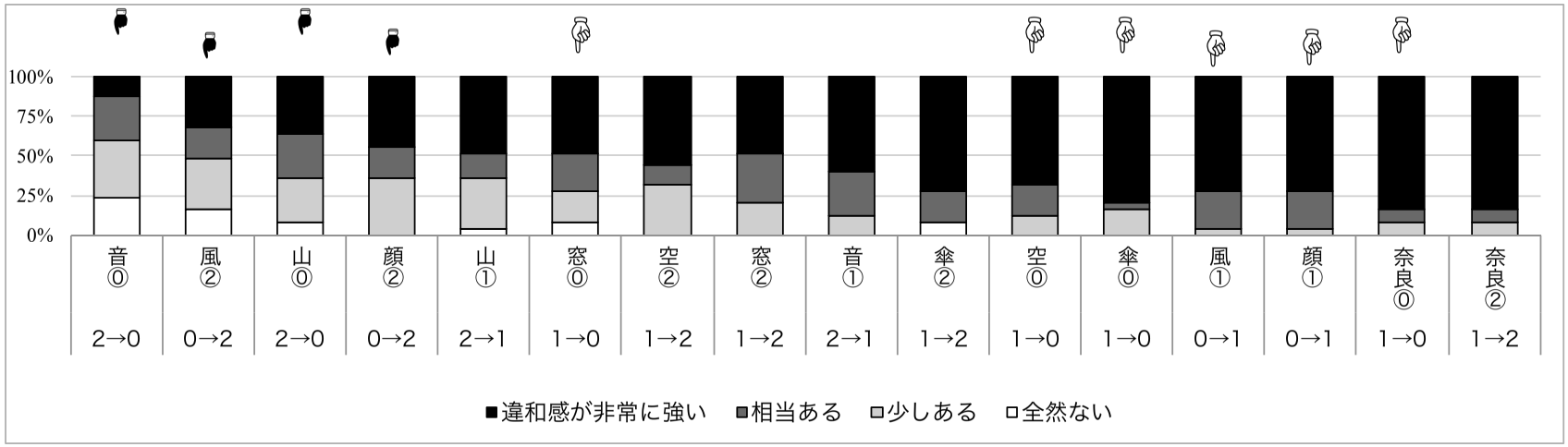

図３　アクセントの違和感：２拍和語名詞（不適切な型についての結果）

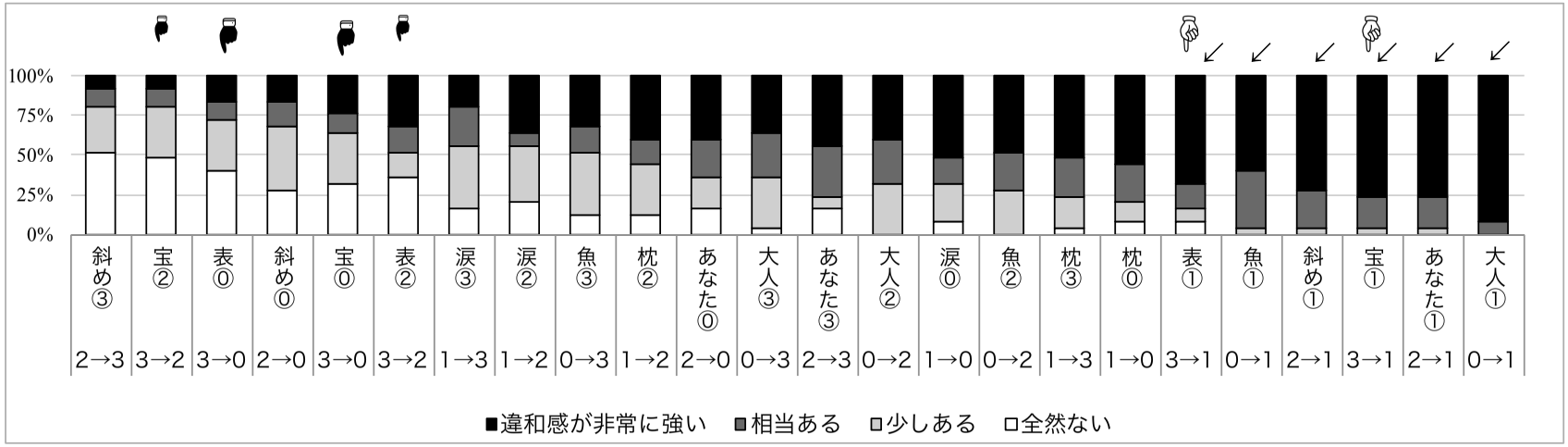

図４　アクセントの違和感：３拍和語名詞（不適切な型についての結果）

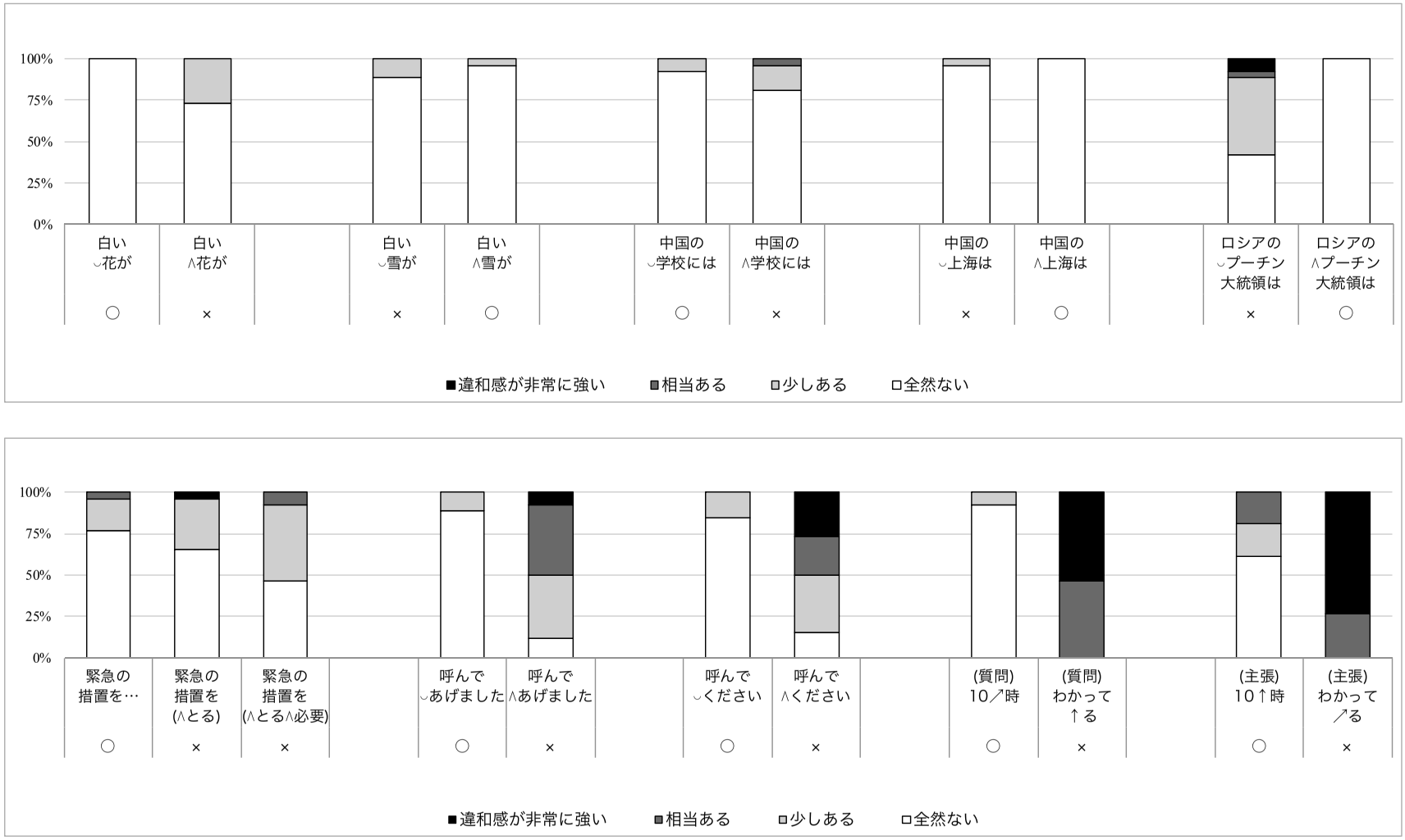

図５　イントネーションの違和感（×は不適切な言い方）

◡：アクセントを弱める，∧：アクセントを弱めない，↗：疑問型上昇調，↑：強調型上昇調

・本来頭高型でないものを頭高型で言うと，違和感が特に強く感じられる（左下向きの矢印）。
・尾高型を平板型または中高型に入れ替えた言い方への違和感は相対的に強くない。図 4 ではこれに黒塗りの指さし記号を付けて示した。しかし，2 拍和語名詞の場合と同じく，尾高型を頭高型に入れ替えた言い方への違和感は強い。図ではこれに白抜きの指さし記号を付けた。

3.2　イントネーションの逸脱に対する違和感

結果を図 5 の 2 枚のパネルに示す。この図では，項目軸に記した言い方に対して感じられた違和感の大きさの割合を積み上げ縦棒の形式で示している。項目軸で文内のイントネーションの適切性の上で問題となる文節の頭に記号「◡」を付けたのは，その文節のアクセントを弱めた発音であることを，記号「∧」を付けたのは，その文節のアクセントを弱めていないことを示す。この図から以下のことが言える。
・「白い花が…」から「緊急の措置を…」までの調査文，すなわち，意味の限定関係の有無と文内のイントネーションの関係を検討するための調査文については（図 5 の上段，および下段の左 3 本），規則どおりの適切な言い方（図 5 で項目軸の最下段に「○」印を付けたもの）に対しては違和感はほとんど感じられていない。しかし，規則に合わない言い方であっても違和感は一般に小さい（図 5 で「×」印を付けたもの）。その中で「ロシアのプーチン大統領」で「プーチン大統領」のアクセントを弱めた発音への違和感が比較的強い。これは「プーチン大統領」が長い語であり，一般に長い語はアクセントを弱める場合でも弱め方は少ないことから（郡 2012），今回の調査に用いたような発音（図 2 の 3 段目左パネルの●印の連続）だと弱め方が大きすぎて，そのことに対して違和感を感じるということがあるかもしれない。

なお，違和感を感じるとする回答が特定の回答者に集中しているということはなかった。
・補助動詞についての調査文の場合は（図 5 の下段の左から 4〜7 本目），補助動詞を弱めない発音は「相当」以上の強い違和感が感じられている。
・末尾のイントネーションについては（図 5 の下段の右 4 本），質問に対する強調型上昇調と，強い主張に対する疑問型上昇調は違和感が非常に強く感じられている。

4 まとめと考察

アクセントやイントネーションの各種の逸脱に対して感じられる違和感の程度について，聴取調査を通じて簡単な検討をおこなった。その結果，2・3 拍の和語名詞については，本来の型とは異なるアクセントに対して感じられる違和感は一般には強いこと，その中で，本来は尾高型である語を平板型で言うことに対しては違和感は相対的に小さいこと，これに対して，本来は頭高型である語を他のアクセントで言うことや（特に 2 拍名詞），本来は頭高型でない語を頭高型で言うことには（2 拍名詞も 3 拍名詞も），強い違和感が感じられることがわかった。

前述した崔壯源氏(2003)の調査結果を見ると，本来は尾高型の 4 拍名詞を平板型で発音した場合の自然性は低くない（「妹は」「弟と」）。拍数は異なるが，本稿の結果と同じ傾向である。崔氏の結果では，3 拍で本来は平板型の名詞，4 拍で本来は尾高型の名詞，5 拍で本来は中高型

の名詞を頭高型で発音した場合の自然性はきわめて低い。これも本稿と同じ傾向である。また，2 拍名詞についての梁辰氏(2015)の「『平板型⇔尾高型』に比べ，『平板型⇔頭高型』および『尾高型⇔頭高型』の方が，自然度が大きく下がる」という報告も本稿の結果と同じである。

文内のイントネーションについては，意味の限定関係が決める規則に違反した発音でも違和感を感じることは少ないようである。しかし，これは意味の限定関係が決める規則の重要性を否定するものとは筆者は考えない。熟練した読み手はこの規則を守っており，意味の限定関係が異なるあいまい文の言い分けは熟練した読み手でなくても言い分け，聞き分けることができるからである。また，冒頭で紹介したように，イントネーションの適切さは読みのじょうずさ評価に貢献している。これらを総合すると，意味の限定関係が決める文内のイントネーションの適切さは，あいまい文を言い分けるためにもじょうずな読みに聞こえるためにも必要であるが，適切でなくても意味の違いが生じない限り違和感は小さいと位置づけることができる。したがって，朗読指導では重要性があるが，日本語教育ではアクセントに優先順位を譲ることになろう。

文内のイントネーションでも，補助動詞を弱めない言い方は強い違和感が感じられる。これは，弱めないと独立した動詞に感じられ，文の意味が変わるためと思われる。

末尾のイントネーションについては，本稿で検討したのは質問と強い主張に対する疑問型上昇調と強調型上昇調のみだが，適切でない言い方には違和感が強く感じられる。

文献

郡史郎(2007)「東京方言におけるアクセントの実現度と意味的限定」『音声研究』12(1), 34-53.

郡史郎(2012)「東京方言における意味的限定と非限定を区別する音声的基準」『言語文化研究』（大阪大学）38, 1-22.

郡史郎(2014)「物語の朗読におけるイントネーションとポーズ ―『ごん狐』の 6 種の朗読における実態―」『言語文化研究』40, 257-279.

郡史郎(2015)「日本語の文末イントネーションの種類と名称の再検討」『言語文化研究』41, 85-107.

郡史郎(2017)「じょうずな朗読とイントネーション」『音声言語の研究 11』（大阪大学）25-36.

郡史郎(2019)「じょうずな読みとアクセント，イントネーション―非母語話者の読みの改善例―」『言語文化研究』45，179-190.

崔壯源(2003)「日本語らしさの許容度の実態調査―アクセント核の移動が影響する日本語らしさ―」『第 17 回日本音声学会全国大会予稿集』213-218.

日本語学会（編）(2018)『日本語学大辞典』東京堂出版.

梁辰(2015)「アクセントの誤用パタンが自然度評価に与える影響の比較」『第 29 回日本音声学会全国大会予稿集』122-127.

謝辞

回答者として御協力いただいた皆様と，調査を手伝ってくださった陳曦さんに感謝します。